



博物館だより

吹田市立博物館開館20周年記念
平成24(2012)年度春季特別展

大庄屋 中西家名品展

会期 平成24(2012)年4月28日(土)～7月1日(日)
前期 4月28日(土)～5月27日(日) 後期 5月30日(水)～7月1日(日)



みなさんは、庄屋と聞くと、どんなイメージを持っているでしょうか。人々から年貢を集めている姿がよくえがられます。しかし、それだけが庄屋の仕事だったわけではありません。ほかにも用水の管理や村の中の争い事の解決、他村との交渉などがありました。そして、“文化拠点”ということも重要な役割でした。特に吹田という地は、京都一大坂の中継地で、数多くの儒者や絵師が訪れ、この地で文化が育まれました。

今回取り上げた中西家は、旧淀藩領の大庄屋（庄屋の中から選ばれる）を務めた家で、江戸後期以降、代々庄屋・大庄屋の職を世襲しました。中西家には、江戸後期から近代に至る時期に収集された絵画や書、煎茶や抹茶の道具が数多く残されています。本展覧会は、会期を前期と後期に分け、中西家に伝わった名品から、中西家が担った文化的側面を眺めてみたいと思います。

(当館学芸員 寺澤慎吾)

長山孔寅「木蓮に孔雀図」

大庄屋・中西家と吹田の大坂画壇

吹田は京都と大坂を結ぶ要衝^{ようしゅう}の地であるとともに、大坂からほど近く、京・大坂の文人達が立ち寄ったり、滞在したりした所である。江戸時代、絵師では池大雅・田能村竹田・金子雪操・鼎春嶽^{いけたいが た の むらちくでん}など、漢詩人では広瀬旭莊^{きよくそう}などが吹田に憩うた。

吹田の旗本・竹中氏の代官であり、多くの文人達と交流をもった井内左門のところへ田能村竹田（1777～1835）は天保6（1835）年7月3日に避暑に行った。竹田はそこで、幕末の吹田の情景を「清曠^{せいこう}、長江百里、自東自西、原田沃野、江口・神崎・玉江・長柄諸名勝・・・離城二里許ながら、風俗ハ大ニ在所ニテ、至極妙也」と息子に書き送っている。又、その時、竹田は病に臥した吹田での閑居を「吹田邑養痾^{しごくたえ}図」として残している。その吹田の地に、嘉永元（1848）年5月28日に、当時、大坂に滞在していた著名な漢詩人の広瀬旭莊（1807～1863）が訪れ、吹田に住んでいた大坂の画家・金子雪操（1794～1857）宅を訪ねる。その後、旭莊は門人で都呂須^{とろす}の西尾善四郎と一緒に吉志部村^{きしべ}の地誌を述べた後、中西宅について「華麗^{かれい}、殆ど侯居^{ほとん こうきょ}に類す^{るい たた}」と称えている。

中西家は伝えによると、武士の出で、近江から来て、この地を拝領し、16世紀終わってから17世紀初め頃に当地に住むようになったものと思われる。それ以降、淀藩領の庄屋や大庄屋を務めていた。中西家には現在、大庄屋としての格式を保ち、文人達を迎え入れ、各代の当主の趣味も加わった、種々の美術品やお茶道具等が残



図1 長山孔寅「漁夫図」

されている。その中でも重きを置くのが、大坂画壇の画家達の作品である。中西家には、長山孔寅^{こういん}（1765～1849）の襖絵と掛け軸が残されている。長山孔寅は秋田生まれで、儒者の村瀬栲亭^{こうてい}の紹介により四條派の呉春に絵を学んで、大坂に出て活躍する。孔寅は狂歌もよくし、“茂佐彦^{さひこ}”の狂歌名もあり、狂歌本に多くの挿絵を残している。画風は四條派の情趣的写生を旨と



図2 月岡雪鼎「六歌仙図」



図3 岡熊嶽「山水図」

した。中西家の奥座敷には「群鶴図」の襖絵12面と「松図」の天袋小襖があり、また、玄関棟奥の六畳間にも「岩図」天袋襖がある。その他、孔寅の作として、「牡丹図」(図4)、「漁夫図」(図1)、「木蓮に孔雀図」(表紙)が残されている。「牡丹図」は“孔寅牡丹”と称される程に得意とした画題であった。この「牡丹図」には広瀬旭莊の賛がある。その他、大坂画壇の画家としては、おかゆうがく岡熊嶽(1762~1833)の「山水図」襖絵がある(図3)。岡熊嶽は、福原五岳に学んだ文人画家で、山水・人物を得意とした。この襖絵には“うしかへい己丑嘉平月”とあり、文政12(1829)年12月に描かれたことが分かる。孔寅・熊嶽の大作が残されているのは貴重である。

その他には、大坂で美人風俗画家として活躍した月岡雪鼎(1710~1786)の法橋時代の「六歌仙図」(図2)と法眼時代の「鶏に唐子図」も興味深い作品である。又、「浪な華な画家見立角力組合三幅対」という番付表に名が残る森周仙という画家の衝立ついでの絵も大坂画壇研究の資料となる作品である。

(大阪芸術大学教授 田中敏雄)



図4 長山孔寅筆、広瀬旭莊賛「牡丹図」

儒者・文人の書

江戸時代の中心的な学問は“儒学”であったといってよいでしょう。幕府によって封建支配の思想として採用され、武士の教養・基本精神の一つとなりました。やがて、余裕のある農民や町民にも広がります。中西家に所蔵される多くの儒者の書は、そうした教養があったことを物語っています。

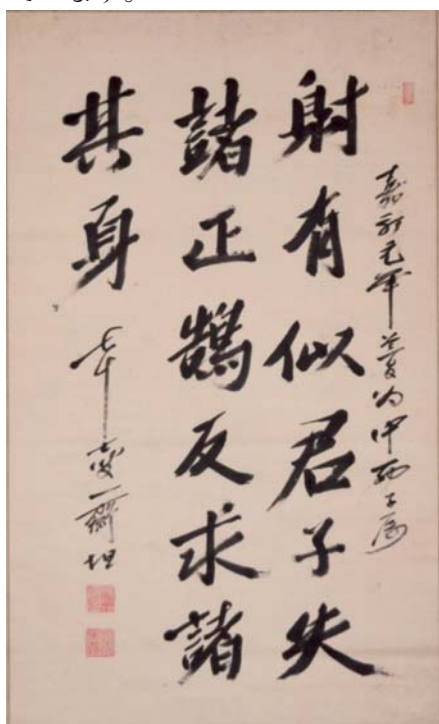


図1 佐藤一斎「三行書」

佐藤一斎（1772～1859）は、昌平坂学問所の総長も務めた当時第一級の儒学者です。後半生の随想録である『言志四録』^{げんししりく}は、指導者の指針とすべき書物として現代まで受け継がれています。「中西子厲」^{れい}への為書きを有す作品（図1）には、嘉永元（1848）年の年紀も入っており、一斎が確かに中西家と交流をもっていたことがわかる資料です。

また、額装されている「涉成園記」^{しやうせいえん き}（図2）は、京都・東本願寺の庭園・涉成園を頼山陽（1780～1832）が誉め讃えた内容で、本作は東本願寺所蔵本の草稿と考えられ、たいへん貴重な資料と言えます。

このほか、陽明学を修め、大飢饉に際して幕府に反乱を起こしたことで有名な大塩平八郎

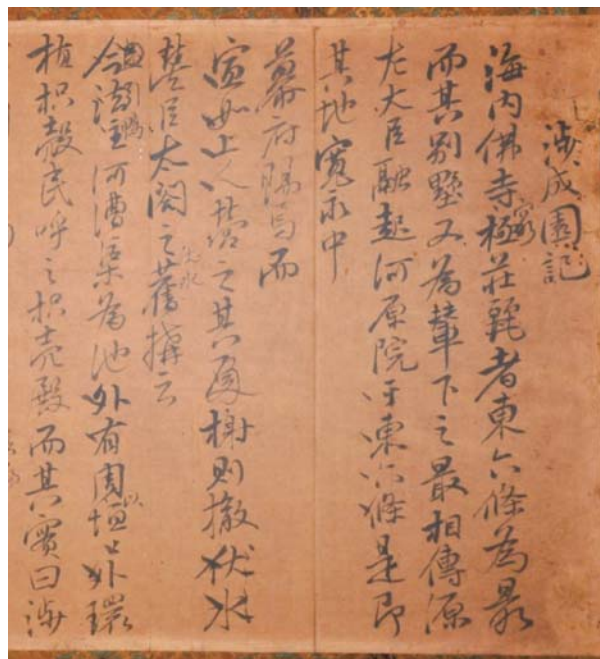


図2 頼山陽「涉成園記（草稿）」（部分）

（1793～1837）や、得意とする七言絶句で“絶句竹外”^{と称えられた高槻藩士・藤井竹外}（1807～1866）の書などが所蔵されています。

さらに、興味深い資料として、陶工で南画家でもあった青木木米^{もくべい}（1767～1833）の書簡があります（図3）。その奔放な字体と行にこだわらない自由さには目を奪われますが、内容的にも“欲深の骨董屋”^{よくぶかのぼんぼう}が登場したり、買ってもらった茶碗が図示されていたり、と面白い資料です。これには金六両の受取状も付属しています。

（当館学芸員 寺澤慎吾）

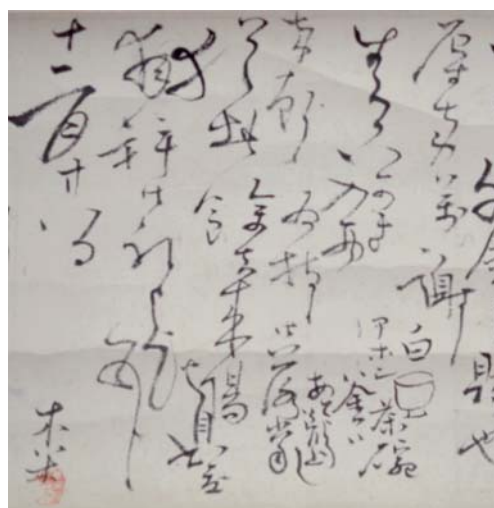


図3 青木木米「山田氏宛書簡」（部分）

工芸品 ～^{せん ちゃ}煎茶道具を中心に～

煎茶道具

中西家所蔵の工芸品中、注目されるのは煎茶道具です。

煎茶と聞くと、「ああいつも飲んでるお茶でしょ。」と返ってきそうですが、煎茶にも煎茶道があり、お手前があって、涼炉やポーフラ（湯瓶）など特有の道具が用いられます。ただ、もともと煎茶道はいわゆる茶道＝抹茶とは異なっていて、形や物にあまりしばられず、清談（俗世間を離れて風流や高尚な話）を語り合うという趣向の中で生まれたと言えます。

中国・唐時代に広まった喫茶（お茶を飲むこと）は、やがて日本へ伝わりますが、日本において本格的な“煎茶道”が始まるのは、江戸時代初期、黄檗宗を開いた隠元隆琦（1592～1673）から、とされています。黄檗僧の墨跡が煎茶の席で重宝されるのはこうした理由によるのかもしれない。

江戸時代中期には、日本の煎茶中興の祖と言われる売茶翁（高遊外、1675～1763）が登場し、禅僧大典顕常、大坂の文人・木村兼葭堂、池大

雅らをはじめ、多くの人々に煎茶趣味が広がりました。

江戸後期には、頼山陽や青木木米、田能村竹田などが煎茶に熱を入れるようになります。

このような煎茶趣味は、日本の文人画に見られるような中国の文人たちへの憧れがその基本にあるとされます。中西家の煎茶道具も、江戸時代後期から明治時代にかけて収集されたと考えられるものが主体となっており、中国で造られ日本に渡来した道具も中にはあります。そのほか、楽焼や玉水焼、朝鮮製の抹茶碗、印鑑などがあり、文雅を好んだ中西家当主の性格が窺えます。

近隣窯の焼きもの

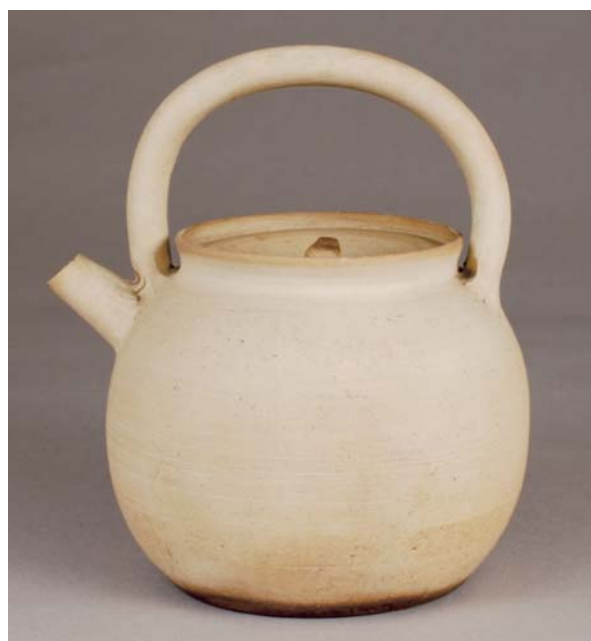
地域のものとして忘れられないのが、大坂・十三に窯のあった吉向焼や高槻に窯のあった古曽部焼の品々です。特に、吉向焼「重箱」は「天保四年」の墨書のある箱に収められており、初代・吉向治兵衛（1784～1861）の作と認められる貴重な作例です。

（当館学芸員 寺澤慎吾）



水越與三兵衛「唐子遊図涼炉」

炭を入れておこすため風通し穴が空けられています



「白泥湯瓶」

湯沸かし。別名ポーフラ。その形からポルトガル語「abobora」（カボチャ）が転用されたといわれます

中西家の古文書 ～元禄16年東村「名寄帳」について～

中西家は、江戸時代前期より旧吉志部東村の村役人をつとめ、後期から幕末にかけては庄屋や、摂州嶋下郡内14ヵ村を束ねる淀藩の大庄屋をつとめました。そのため中西家には、当家に^{こもんじょ}関する古文書とともに、近世の東村や岸部地域全体に関わる古文書が多数残されています。その多くはすでに市史編纂^{へんさん}にあたって調査が実施されていましたが、最近新たに数十点の古文書が見つかりました。ここではその中から1点、元禄16（1703）年の東村「名寄帳」について紹介します。

今回の調査では計5点の^{なよせちよう}名寄帳を確認することができました。その中で最も古いものが元禄16年の「名寄帳」です。名寄帳とは、土地の所有者ごとにその田畑屋敷の地名・等級・面積・石高を記した年貢収納のための土地台帳で、庄屋の手元で保管されました。村の基礎資料となるもので、村内の田畑保有状況などを把握することができます。

この文書によりますと、元禄16年段階における東村の所持高構成は、村高865石3斗2升8

合のうち、100石以上が2名、60～100石が0名、50～60石が2名、40～50石が2名、30～40石が0名、20～30石が4名、10～20石が5名で、残る約105名（^{でさく}出作人等含む）が10石未満となっていました。すなわち10石以上の者は全体の1割ほどでしたが、その持高合計は村高の7割以上を占め、とりわけ上位2名が突出していたことがわかります。

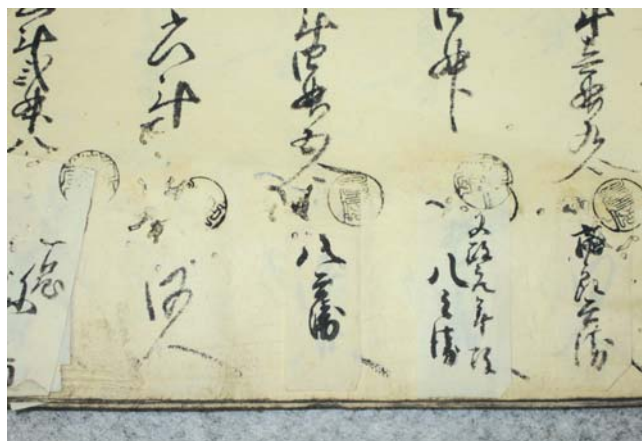
ところで文書中には、土地所有者の記名部分のほとんどで所有者変更のための貼紙があり（1か所に7枚もの紙が重ねて貼られているところもあります）、所有者の変化をうかがい知ることができます。また、一部の貼紙には変更年も併記され、そのうち最も新しい年紀は文政10（1827）年となっており、このことからはこの名寄帳が、初めに作成されてから100年以上が経過してもなお使用されていたということがわかります。その間、大事に守り受け継がれてきたのでしょう。

以上、中西家に残された1点の古文書から、およそ300年前の東村の様子やこの古文書自身の歴史の一端を見てきました。このような地域の歴史を知る上で欠かせない資料は、地域の中にもまだたくさん眠っているかもしれません。それらを守り、後世に残すことで、歴史は未来へと伝えられてゆくのです。

（当館文化財保護係 中岡宏美）



表紙



貼紙の様子

小松左京写真展 ～宇宙に^{はばた}く夢～

会期 平成24(2012)年3月17日(土)～4月22日(日)



株式会社イオ（小松左京事務所）提供

この写真展は、小松左京の知的活動の軌跡を「SFで未来を予言する」、「大阪万博と花博」、「家族と、友と」、「すいはくと小松さん」にわけ、それに、みんなが参加できる「私の一枚」の展示を加えたものから成っている。昨年3～4月におこなった「梅棹忠夫写真展」は前年(2010年)なくなった梅棹さんのメモリアルのためだった。ところが、その年の7月に小松さんが逝去したために、2年連続で同じ趣旨の展示を開催することにしたのである。

小松さんと梅棹さんからは、万博展をはじめとする特別展の資料提供、構成、広報など多大な協力、さらには講演までお願いしてたいへんお世話になった。どうすればあんなビッグを呼べるのかとうらやましがられたものだ。その理由の一つは、この2人の巨人が吹田市と豊中市を中心とする千里地域（グレーター千里と呼んでいた）にある博物館、大学、研究所、実業家

やマスコミ関係者に呼びかけ「地域文化の振興と発信」という目的に沿った活動をくりひろげ、それにうまく乗せてもらったからだと思う。その効果はめざましく、すいはくは活性化して、入館者数も大きく伸びたのである。

この写真展を開催するにあたって、小松左京事務所の乙部順子さんに協力をお願いしたところ快諾され、写真をはじめとする資料の提供を受けた。めざましかったのはイベントの充実ぶりで、当初は2、3と思っていたが、何と11コマを数えることになった。もちろん予定した展覧会ではなかったので、予算不足に悩んだが、講師たちには小松さんの広い交友関係を反映して、ボランティアでやってもらえることになった。小松さんが学者、作家、マスコミ、そして市民にひろく愛され、大きな影響力を持っていたことに驚く。

小松さんの原点は、日本が破壊され、人々が飢えに苦しんだ少年時代の戦争体験にあるようだ。それを、SFという新しい世界の視点にたつことで、「一筋の希望の光」がみえる世界を描き出したことは『日本沈没』をはじめとする作品にみることができる。私たちは今、3・11災害に遭遇し未来への不安におびえながら暮らすようになった。「日本人はできる」という小松さんのメッセージをうけとめ、次の世代につなげて行くことを願っている。

(当館館長 小山修三)



株式会社イオ
(小松左京事務所) 提供

大庄屋 中西家名品展 関連イベント

テーマ：江戸の教養

講演会・歴史講座など（申込不要・先着120名）

5月13日（日）14時～15時30分
講演会 書に親しむ～儒者・文人の書～
天門美術館館長 池田方彩氏

5月20日（日）13時～14時
展示解説

当館学芸員 寺澤慎吾

5月26日（土）14時～15時30分
講演会 中西家の大坂画壇～長山孔寅を中心に～
大阪芸術大学教授 田中敏雄氏

5月27日（日）14時～15時30分
講演会 謎の画家・広渡湖秀一彼は何人いたのか？
神戸市立博物館学芸員 石沢俊氏

6月9日（土）14時～15時30分
古文書入門 中西家文書をよむ
当館学芸員 池田直子
博物館トーク 中西家文書について
当館職員 中岡宏美

6月10日（日）14時～15時30分
講演会 こんなに面白い大坂画壇
～近世文人たちの交流、木村兼葭堂を中心に～
大阪大学総合学術博物館館長 橋爪節也氏

6月16日（土）14時～15時
展示解説
当館学芸員 寺澤慎吾

6月23日（土）10時～11時
解説会 旧中西家住宅庭園の現地解説会
（要申込、定員20名）
京都造形芸術大学教授 仲隆裕氏

6月23日（土）14時～15時30分
講演会 やきものから見る江戸時代
～中西家所蔵品より～
兵庫陶芸美術館学芸員 梶山博史氏

6月30日（土）10時30分～12時
講演会 今に伝わる五節句 七夕
香道教林坊流菫風会 早川光菜氏

7月1日（日）14時～15時30分
歴史講座 報告：中西家美術資料調査
当館学芸員 寺澤慎吾

*いずれも参加費無料。「要申込」のイベントは
10日前までに、はがきかファックスに講座名、
日時、住所、参加者名、電話番号を書いて博
物館へ。応募多数の場合は抽選。

●「大庄屋 中西家名品展」会期中の休館日
祝日を除く月曜日と祝日の翌日（但し、5月
4日～6日は開館）、5月29日（展示替えの
ため）

ワークショップ・演奏会など

4月28日（土）14時～15時30分
体験 文人煎茶を体験しよう！
（要申込、定員30名）
一茶菴宗家 佃一輝氏

4月29日（日）14時～16時
体験 親子で日本画体験（要申込、定員15組）
兵庫県日本画家連盟会員 島田直季氏

4月30日（月・祝）14時～15時
演奏会 伝統の響き 和太鼓演奏
郷土サークル 野火

5月3日（木・祝）10時30分～12時
演奏会 古来の楽器～箏・尺八・三味線～
たまたて箱

5月4日（金・祝）
10時～12時、13時30分～15時30分
体験 楽しいおもちゃを作って遊ぼう
（要申込、定員各30組） SA吹田

5月5日（土・祝）10時～16時
クイズ 展示クイズラリー（随時受付）
吹田市立博物館ボランティア有志の会

5月6日（日）10時～15時
体験 伝統あそび・たのしい折り紙づくり
（随時受付） 折り紙玉手箱

5月12日（土）10時～16時30分
体験 拓本をとってみよう（随時受付）
北千里拓本クラブ

5月19日（土）10時～12時
体験 古文書裏打ち体験（要申込、定員20名）
工房レストア 平田正和氏

5月20日（日）10時～12時
きもの着付 自分で着物を着てみよう
（要申込、定員10名） 西田智誉氏

6月3日（日）14時～15時30分
演奏会 洋楽器で和を表現 三本正樹氏 ほか

6月9日（土）10時～12時
体験 古文書裏打ち体験（要申込、定員20名）
工房レストア 平田正和氏

6月17日（日）14時～16時
体験 親子で日本画体験（要申込、定員15組）
兵庫県日本画家連盟会員 島田直季氏

6月24日（日）10時～12時、14時～16時
体験 親子で消しゴムはんこをつくろう
（要申込、定員各10名） 前河直子氏

6月30日（土）14時～15時30分
体験 香りで楽しむ七夕（要申込、定員30名）
香道教林坊流菫風会 早川光菜氏